

SHOW HEY シネマルーム

★★★

アントニオ猪木をさがして

2023 年 / 日本映画
配給：ギャガ / 108 分

2023 (令和 5) 年 10 月 9 日鑑賞

TOHO シネマズ西宮 OS

Data

2023-119

監督：和田圭介 / 三原光寿

出演：アビット・ハルーン / 有田哲平 / 海野翔太 / オカダ・カズチカ / 神田伯山 / 棚橋弘至 / 原悦生 / 藤波辰爾 / 藤原喜明 / 安田顕 / 番家天嵩 / 田口隆祐 / 大里菜桜 / 藤本静 / 山崎光 / 新谷ゆづみ / 徳井優 / 後藤洋央紀 / 菅原大吉 / 内間政次 / 片山芳郎 / 中村喜夫 / 藤井健 / ナレーション：福山雅治

👁️👁️ みどころ

何を隠そう、私は大のプロレスファン！アントニオ猪木の勇姿をリング上で直接見たことはないが、女子プロレス界のスターだったミミ萩原を間近で観戦したこともある。1976 年のアントニオ猪木 VS モハメド・アリの異種格闘技戦は“凡戦”だったが、70～80 年代における、毎週金曜日午後 8 時からのプロレス中継における“燃える闘魂”ぶりは見応え十分だった。

偉人、カリスマ、挑戦者、変人、異端児、最強、至宝、英雄、等と、彼を表現する言葉は多い。そんな男をターゲットに、2022 年に創立 50 周年を迎えた新日本プロレスがドキュメンタリー映画を企画したのは当然だが、ドキュメンタリー映画の作り方は難しい。

本作の 2 日前に見た『ヒッチコックの映画術』(22 年) は“素晴らしい監督”が、“素晴らしいアイデア”で“魅せてくれた”が、私見では本作は大失敗！なぜ講談師の神田伯山や俳優の安田顕、徳井優らを登場させたの？なぜ 3 編のドラマパートを挿入したの？そんな小細工をしなくとも、観客を感動させる“猪木ネタ”は山ほどあったはず。私は、そう思うのだが・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■私は大のプロレスファン！女子プロレスの観戦も！■□■

日本におけるテレビの一般家庭への普及は、私が小学校の高学年の頃だが、貧乏な我が家では高値の花だった。それでも、私の家に店子で入っていた一軒が電気屋さんだったから、週に 1 度か 2 度はそこで TV を観るのが私の楽しみだった。力道山をメインとするプロレス人気が高まり、TV の前に人だかりができ、空手チョップで外国人レスラーを倒す度に拍手が巻き起こったと言われているが、私の故郷、松山ではそんな風景は見られなかった。プロレス人気とともに相撲人気も高く、栃錦 VS (初代) 若の花戦の人気はすごかった。

そんな私だが、中高校生時代は受験勉強に追われ、大学時代は学生運動に多くの時間を取られたため、プロレスのことはほとんど知らなかったが、1974年に弁護士登録をし、TVを見る時間が増えていくと、70年代後半からはいくつかの歌謡番組と共に、金曜日午後8時からのプロレス中継は必見番組になった。当時、ジャイアント馬場は既に盛りを過ぎていたが、アントニオ猪木はまさに天を衝く勢いだっただ。アントニオ猪木と大木金太郎、ラッシャー木村、アニマル浜口、前田日明、谷津嘉章、長州力ら日本人選手同士の闘いも面白かったが、アントニオ猪木とドリー・ファンク・ジュニア、タイガー・ジェット・シン、アブドーラ・ザ・ブッチャー、スタン・ハンセン、ブルーザー・ブロディ、アンドレ・ザ・ジャイアントらキャラ豊かな外国人選手との対決は更に面白く、手に汗を握る激闘だったから、毎回大興奮したものだ。ちなみに、女子プロレスは1976年のビューティ・ペアの登場によって全盛期を迎えたが、私が住んでいた奈良県生駒郡斑鳩町にミミ萩原等の一行が巡業でやってきた時は、何を観ても観に行っただ。

偉人、カリスマ、挑戦者、変人、異端児、最強、至宝、英雄、と数多くの言葉で言い表されてきたアントニオ猪木が亡くなったのは2022年10月1日、79歳の時だから、今『アントニオ猪木をさがして』と題するドキュメンタリー映画が公開されたのは、実にタイムリー。プロレスファン、猪木ファンの私としては、こりゃ必見！

■□■企画の開始は誰の発案で？監督は誰が？その構想は？■□■

1974年に弁護士登録をした私は来年2024年が弁護士50周年だが、1972年にアントニオ猪木が“旗揚げ”した新日本プロレスは、2022年が創立50周年になる。1989年から参議院議員としての活動を開始したアントニオ猪木は、晩年は病気に倒れ、辛い闘病生活を送っていたが、そんな猪木と新日本プロレスとの関係は10年以上途絶えていたらしい。しかし、新日本プロレス50周年を前にして両者の距離が縮まり、ドキュメンタリー映画制作の企画に、猪木も「目を細めた嬉しそうな顔」をしたようだ。

そんな企画のドキュメンタリー映画の監督を誰がやるの？近時、『クエンティン・タランティーノ 映画に愛された男』（19年）（『シネマ53』89頁）、『ジャン＝リュック・ゴダール 反逆の映画作家』（22年）（『シネマ53』131頁）、『ヒッチコックの映画術』（22年）と、立て続けに3本のドキュメンタリー映画を見てきた私には、それが最大の注目点。だって、劇映画と同じようにドキュメンタリー映画も監督の視点によってその出来が全然違ってくるのだから。前記のように、さまざまに表現される人間「アントニオ猪木」の“ネタ”は山ほどある。したがって、“本業”のプロレスの試合のメイン場面をつないただけでも立派なドキュメンタリー映画になるはずだが、さて和田圭介監督は本作をいかなる構想で？

■□■原点はブラジルに！これは良し！しかし、その後は???■□■

現在、アメリカでもヨーロッパでも大量の移民が大きな社会問題になっているが、かつては日本からも大量の移民が船に乗ってブラジルに渡っていた。それは一体なぜ？また、

アントニオ猪木はジャイアント馬場の愛弟子として成長したが、2人の出会いはどこに？

本作冒頭は、カメラがブラジルのコーヒー農園を追い、少年時代の猪木寛至を知っているという数人の男（老人）たちが、さまざまな思い出話を語ってくれるので、それに注目！そこで猪木少年がジャイアント馬場の目に留まり、スカウトされて日本に戻ってくるのがなければ“燃える闘魂”アントニオ猪木の人生は、ブラジルでのごく平凡なものに終わっていたわけだ。

アントニオ猪木の原点がブラジルにあったことを最初に明示する本作の狙いは良し！しかし、その後は全然ダメだ。本作にアントニオ猪木と親交の深い写真家・原悦生が登場するのは、ある意味で当然。また、新日本プロレスの現在を支えているプロレスラーである、オカダ・カズチカ、棚橋弘至らが登場するのは当然。アントニオ猪木の片腕的存在だった坂口征二の登場がないのは残念だが、アントニオ猪木と共に戦った藤波辰彌や藤原喜明の登場も当然だ。しかし、なぜ本作に講談師の神田伯山や、俳優の安田顕、徳井優、菅原大吉らが登場するの？

神田伯山はプロレス講談「グレーゾーン」を創作し、CSTV「神田伯山の“真”日本プロレス」の司会を務めたそうだが、それはあくまで自分の芸域の中にアントニオ猪木という強烈なキャラクターを取り入れただけのことだ。和田圭介監督は、その神田伯山が演じるアントニオ猪木 VS マサ斎藤の“巖流島決戦”（1987年10月4日）を本作の大きなポイント（売り）にしているが、これは私には全くナンセンス！また、安田顕の芸達者ぶりは認めるものの、熱烈なプロレスファン、猪木ファンだからといって、したり顔で（？）インタビューされても、私には全然響いてこない。

■□■3編のドラマパートもナンセンス！なぜこんな小細工を■□■

劇中劇は面白い！それが私の持論だ。そして、それは『恋に落ちたシェイクスピア』（98年）で実証されている。しかし、本作では、三原光尋が監督を務める3編の「ドラマパート」が“劇中劇”（？）として挿入されている。このアイデアがどこから生まれたのかは知らないが、私はこんな“演出”を見て「私が観たいのはこんなドラマではなく、アントニオ猪木のドキュメンタリー映画だ！」と大声で叫びたい気持ちでいっぱい。

3編のドラマ自体はそれなりによくできており、その時代時代のアントニオ猪木の存在を、それなりの視点で切り取っている。しかし、私はこんなドラマを見に来たのではなく、アントニオ猪木のドキュメンタリー映画を観に来たのだ。こんなドラマを見たいのなら、テレビで年がら年中やっているくだらないドラマを観ればいいだろう！

ドラマパートで取り上げられているのは、アントニオ猪木 VS ホーガン戦（1984年6月14日）とアントニオ猪木 VS ベイダー戦（1996年1月4日）だが、この両試合は歴史に残る名試合だから、それをこんなくだらない（？）ドラマ仕立てにする必要は全くなし！それなのに、なぜこんな小細工を？そう思ったのは私だけ・・・？

2023（令和5）年10月12日記